

田能(たの)遺跡 発掘裏話

遺跡保存の裏側で 保存か開発か…壮絶なせめぎ合い

田能(たの)遺跡は、昭和40年9月、尼崎市田能(たのう)字中ノ坪(現在の田能6丁目)尼崎・伊丹・西宮三市共同による工業用水園田配水場の建設工事中に大量の弥生土器(やよいどき)が発見されたことから、その存在が明らかとなりました。特に注目されたのが、木棺(もっかん=木で作られたかんおけ)発見です。木は腐りやすいため、それまでは推測でしかなかった弥生時代の木棺埋葬(まいそう=死者を土の中に埋めてあげること)の風習が初めて具体的な形で証明されました。木棺墓のうち二基の被葬者(ひそうしゃ=埋められた者)は白銅製腕輪(はくどうせいうでわ=白銅で作った腕輪)、碧玉製首飾り(へきぎょくせい首かざり=碧玉という宝石で作った首飾り)を着けて埋葬されるなど、この時期の墓のしくみ、集落と墓域(ムラとお墓の地域的な結びつき)が解明されました。考古学上において重要な遺跡で、1969年に国の史跡(しせき=歴史の跡、証拠となるもの)に指定されました。

このように画期的(かっきてき=今までにあまり例がない)な発見であったのにも関わらず、その裏側には、遺跡保存派と配水場建設派との攻防、せめぎ合いがありました。当時の日本は高度経済成長の絶頂期で、配水場建設は阪神工業地帯に不可欠の一大プロジェクトだったため、また、当時の尼崎市は工業用水としての地下水の使用による地盤沈下に悩まされていたため、工事は緊急性が高いものでした。そのため工事を中断して発掘調査を行なうことはできず、工事車両に追われながらの緊急調査が10月から開始されました。調査は、「ブルドーザーに追い立てられながら…」「土器がバリバリと壊されていく中で…」などすさまじい状況の中で、寝る間も惜しんで行なわれたということです。まさに日々苦闘(くとう=苦しいたたかい)です。

調査には、一般市民や学生など多くの有志(ゆうし=気持ちを同じくする)の方々の参加もありました。調査費の少ない中で、手弁当(てべんとう=ボランティア)での参加や炊き出し(たきだし=食物を無料で配ること)などの協力を得て、貴重な発見が続きました。次第に新聞・テレビを通じた報道が行なわれるようになり、遺跡に対する関心がさらに全国に拡大していきました。市民の間では遺跡を破壊から守り永久保存を訴える声が高まり、重要性を訴える講演会や保存の署名運動などが進められました。昭和41年6月、市は建設予定区画を変更し、遺跡の保存が決定されました。地層が語る歴史には「表と裏」「光と影」があり、それぞれに人々の苦労や様々な想いが込められています。



参考資料および写真：尼崎市立地域研究史料館「図説尼崎の歴史」

発掘調査に参加する中学生たち